

7

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
藤田 徳枝	女性	87歳	22歳	大海

(富岡東部 実家の祖母)

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

一宮にある大沢螺子（OSGの前身で、螺子はねじのこと）の仕事の一部を工場疎開させるために、川路の勝楽寺に移す準備をしていました。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

勝楽寺で仕事をしていて、お昼の休憩にラジオで聞きました。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

勝つことを願い、一生けん命働いていたので、頭が真っ白になり、みんなで泣きました。今でも忘れられません。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「目の前で工廠の爆撃が」

終戦の時はもうやめていましたが、18年4月に志願して、豊川海軍工廠に1年半ほど務めていました。私の仕事は第二弾薬砲班の火工部検査係で、おもに銃弾を検査する仕事でした。銃弾は、20mm、25mm、40mmの3種類がありました。

海軍工廠の爆撃の時は、大沢螺子の一宮工場にいました。夜勤が終わり、着替えをしていた時、B29が大編隊を組んで攻撃しました。こわがって布団にもぐり込んだ人もいました。私はこの目で、爆撃の様子をずっと見ていました。ものすごい数の爆弾が次々と落とされました。

「ヒューッ、ドカーン！、ヒューッ、ドカーン！」爆弾が落下する音とさく裂する音、地ひびきで体がゆさぶられ、爆風でガラスは割れんばかりでした。空一面に黒い煙や炎が立ちのぼりました。初めて見る空襲に、足がガタガタふるえました。

爆弾は、海軍工廠だけに集中的に落とされ、一宮工場には落とされませんでした。この時、妹は海軍工廠に勤めていましたが、運がよく、ちょうど新城の高等女学校へ出張に出ている助かりました。

飯田線の線路に爆弾が落とされて飯田線が不通になり、大海まで歩いて帰りました。母親は、私も妹も空襲でやられたと思っていたようで、私の顔を見るなり、抱きしめて喜んでくれました。

後で思い出すと、爆撃の1週間前、大沢螺子の食堂から出た時に警戒警報が出されました。警戒警報どころか、飛行機はすぐ近くに迫ってきて、低空で屋根すれす



(写真提供…桜ヶ丘ミュージアム)

▲ 海軍工廠 銃弾の湿気を取る作業

れを飛んでいきました。操縦席そうじゆうせきに乗っているアメリカ兵の顔がはっきり見えたほどです。それは偵察機ていさつき*1で、工廠を回っていたようです。その時ビラもまかれ、「戦争をやめろ」という内容だったと聞きました。

海軍工廠なで亡くなった人たちの慰霊いれいには、何十年も通いました。豊川稲荷いなりうらの裏にある供養塔くようとうに、当時の検査の人たちと共に、毎年8月にお参りしていました。

思い出しても、つらく、悲しいことばかりで、戦争は二度とあってはならないと思います。食べるものも、物もなく、あわれな生活でした。今は幸せで、ここまで生かしてもらえたことに感謝しています。

豊川海軍工廠

豊川海軍工廠は、1939年（昭和14年）に建設が始まり、戦争の拡大とともに増設され、巨大兵器工場へと発展していきました。機銃の生産では日本最大の規模で、東洋一の兵器工場といわれました。敷地は、工場部分だけで186ヘクタール（外周が約6.3km）あり、宿舎や病院などの付属施設をふくめると、300ヘクタールにもなりました。建設費用は、当時の金額で約8億円かかりました。（当時の工員の日給が1～2円）海軍が使用する約7割の機銃と銃弾、光学器などを生産し、軍人、工員、徴用工、女子挺身隊、そして動員学徒など約56,000人が働き、うち3割が女子だったそうです。

戦局がきびしくなると、青年男子は、続々と戦地へ召集しやうしゅうされ、労働力不足が深刻化しました。当初は、短期間の勤労奉仕のかたちだった学生や女子の勤務は、1944年（昭和19年）の学徒動員実施などで、強制的な動員となりました。全国の大学、東三河の中等学校、女学校からもかり出されました。また、関東・北信越からも乙女たちが挺身隊として動員されました。通勤できない者は、宿舎住まいとなりました。

1945年（昭和20年）3月には、卒業を迎えたわずか12～13歳の国民学校高等科児童までもが動員の対象となり、中学生になると、男女を問わず学徒動員として兵器を作る工場などで働くことになりました。海軍工廠へも大ぜい動員され、彼らが生産を支える存在となっていました。

そして、運命の8月7日、米軍の長距離爆撃機B29の124機と、P51戦闘機45機からなる大編隊による空襲を受けました。午前10時13分からわずか26分間に3,256発もの500ポンド爆弾が投下され、豊川海軍工廠は壊滅的な被害を受けました。

この空襲により、2,500人以上の尊い命が失われ、その数倍の人々が負傷しました。その中には、大ぜいの少年少女たちもふくまれていました。そして、焼け跡の片づけもままならない8月15日に終戦を迎え、兵器工場としての歴史を終えることとなりました。

<参考> ・東三河の100年
・豊川海軍工廠資料集



▲ 女子工員記念写真（提供：桜ヶ丘ミュージアム）

*1 アメリカ軍は、空襲の準備をあらかじめしっかり行っていました。昭和19年から各地の軍需工場などを上空から写真撮影を行い、空襲の計画を立ててきました。